

# オンライン英会話の学校現場における 可能性と導入

神奈川県／聖光学院中学校高等学校 教諭 佐藤 貴明

## 概要

本研究は、昨今急速な成長を見せる「オンライン英会話」に着目し、学校現場における導入事例をまとめた実践報告である。導入には何が必要とされ、どのような手順を踏めばよいのか、その流れを注意点も含めできるだけ詳しく記した。導入に際し、オンライン英会話講座が学習者の英語力向上にどれだけ寄与するのか、実験群と統制群を用意して、プレテストとポストテストを実施することで検証を試みた。また、受講後にアンケート調査を実施することで、オンライン英会話講座が英語学習におけるモチベーション向上に作用するのかについても検証した。今回の実験では、リスニングにおいてわずかな伸びが観察されたが、リーディングやライティングにおいては、有意な結果は見られなかった。しかし、アンケート調査では、オンライン英会話講座が学習者のモチベーション向上に多大な影響を与えることが明らかになり、学校現場における大きな可能性を示唆する結果となった。

## 1 はじめに

大学入試改革案が発表されて以来、英語教育の現場には緊張が走り続けている。現場に緊張感を与えている一つの要因は、やはり4技能型試験への移行に伴う「スピーキング指導の必要性」であろう。これまで日本における英語学習の動機の大きな部分は大学入試が占めてきたと言っても過言ではない。その大学入試が変わるとなれば、学校

教育における英語指導にも当然のことながら変化が求められる。これまでなかなか着手できずにいたスピーキングに対し、いよいよ向き合わなければいけなくなったのだ。しかし、日常生活における英語使用機会に乏しい日本国内にあって、いかにしてスピーキング力を養っていくのか。長きに渡り課題とされながらも、大きな成果を生むことのなかったスピーキング指導は今、ターニングポイントを迎えている。

本稿は、日本における英語教育の取り組みの一つとして「オンライン英会話」の可能性を探るものである。実験やアンケート調査も並行して行ったが、本稿の主たる目的は研究結果そのものではなく、学校教育におけるオンライン英会話導入の検討から実施に至るまでの流れや手順を記すことにある。一私立校の取り組みに過ぎないが、今後検討される際の参考になるよう、できるだけ具体的にその過程を記していく。

## 2 オンライン英会話とは

「オンライン英会話」という言葉は最近では徐々に浸透してきたように思われるが、まだまだ一般化された言葉ではないので、稿を進めるにあたりまず定義しておきたい。本稿における「オンライン英会話」とは、「英語を母語または公用語とする人と、Skype（スカイプ）等の無料通話ソフトを利用し、マンツーマン（またはグループ）で行うレッスン」とする。

オンライン英会話の歴史はまだ浅い。2000年以降徐々に数を増やし始め、今では大小100以上にもおよぶオンライン英会話サービスが存在している（嬉野，2013）。サービスを提供する会社によって多少の違いはあるものの、主な特徴として以下の3つが挙げられる。

1. リーズナブルな料金  
(1レッスン25分あたり100～150円程度)
2. 自分の好きな時間に受講可能  
(朝6時頃～夜中1時頃まで)
3. 通学不要で、通信環境さえあればどこでも受講可能

上記3つの中でも、オンライン英会話最大の特徴はやはり、1の料金である。1レッスン25分あたり、100～150円程度というのは、これまでの英会話スクールと比べると衝撃の価格である。業界最大手の株式会社レアジョブを運営する加藤(2011)によれば、低価格を可能にしている理由は主に以下の2つだという。

1. 英会話スクールのように校舎を持たず、世界中どこでも無料で通話できるインターネットサービスを利用してレッスンを提供している
2. インターネット通話サービスでフィリピンと日本を結び、人件費の安いフィリピンで講師を採用している

日本とフィリピンでは一人あたりのGDPにおいて約10倍もの所得格差があるため、現地英語講師に十分な報酬を支払いつつも、日本で格安のサービスを提供することが可能だという。

この価格設定により、これまで英語教育に注力してこなかった百貨店や飲食、レジャーといった国内型産業までもが、2020年の東京五輪開催に向け、社員教育の一環として英語を位置づけるようになってきている（週刊ダイヤモンド，2015）。

では、学校現場ではどうかというと、「学校教育では文部科学省の学習指導要領に基づきカリキュラムを作成するため、オンライン英会話の時間を確保するには難しい面もある」（産経ニュース，2015）。そのため現状は、各校それぞれの努力と工夫によって緩やかに導入が進んでいる状況である。

## 3 導入背景

本校におけるオンライン英会話導入検討は、やはり先述の大学入試改革と切り離すことはできない。本校は1958年に神奈川県横浜市に創立されて以来、カトリックの信念に基づき、進学校として難関国公立・私立大学への進学をサポートしてきた。当然、受験指導は教育における主たる目的ではないが、本校における教育の大きな比重を占めるものである。つまり本校にとって大学入試改革は、対岸の火事ではなく、向き合わなければならない課題と言える。

また、大学入試改革と並んで導入背景にあったのが、昨今急速に進むICT（Information and Communication Technology）教育の存在であった。教育の在り方、学びの在り方が見直される中、本校においてもICT教育の検討が進められていた。その一環としてGoogle Apps for Educationを導入し、2015年11月には生徒一人ひとりにメールアドレスを配布した。また、後述のように2016年4月には、中学2年生全員にChromebookを配布している。

オンライン英会話は、「大学入試改革」と「ICT教育」という2つの大きな課題への取り組みの中から、対応策の一つとして浮上してきたものであった。

## 4 導入手順

### 4.1 業者の選定

当然のことながら、オンライン英会話の講師の手配や運営システムの構築を学校内部で行うことは難しいため、パートナーとなる業者が必要になる。本校の場合、業界最大手の会社と比較的新しい会社の2社に相談させていただき、最終的に後者の会社「株式会社ぐんぐん」と組ませていただくことにした。数あるオンライン英会話サービスの中から株式会社ぐんぐんを選択した理由は、何より、意思決定のスピードにあった。初回の打ち

合わせから代表取締役自ら出席いただき、学校からの要望にその場で一つ一つ判断を下していただけたことが大きかった。意思決定のスピードは、新規事業の立ち上げにおいてとても重要な要素である。こうした経緯から、株式会社ぐんぐんに本校のオンライン英会話プログラムの立ち上げを協力依頼することとなった。

## 4.2 導入計画

オンライン英会話導入案が出てきたのは2014年12月。先述の通り、そもそものきっかけは大学入試改革であったため、2015年度入学の生徒が中学2年生になる時に学年一斉導入することを着地点と考え、以下のような計画を立てた。

2015年度

**第1フェーズ** 1学期：中学2年生～高校1年生の希望者から45名選出して試験的に実施

**第2フェーズ** 2学期：中学2年生～高校1年生の希望者全員を対象に実施

**第3フェーズ** 3学期：中学2年生～高校1年生の希望者全員を対象に実施

2016年度

**第4フェーズ** 1学期：中学2年生全員を対象に実施  
中学3年生～高校2年生の希望者全員も引き続き受講

## 4.3 導入形態の検討

### 4.3.1 学校管理型か生徒自主管理型か

オンライン英会話を学校に導入するには大きく分けて2つの方法がある。

- (1) 学校管理型：正規授業（英語や英会話など）や放課後プログラムとして学校が主体的に管理する
- (2) 生徒自主管理型：学校は代理店的な役割を担い、サービスの紹介と斡旋のみを担う

(1) 学校管理型・(2) 生徒自主管理型のいずれのスタンスを取るかは、各校の教育理念や方針が大きく関係してくるところではあるが、本校は最終的に学校管理型のスタンスを取ることにした。生

徒自主管理型にした場合、サービスに登録するだけで満足し、次第に受講しなくなる生徒が増えることが懸念されたためである。オンライン英会話は、スポーツジムのビジネスモデルに似ているところがあり、勢い勇んで登録したものの、気づけば毎月会費だけ払う幽霊会員になってしまう可能性がある。したがって本校では、学校管理型のスタンスをとり、受講曜日や時間、場所をあらかじめ決めることにした。これにより、「受講時間や場所に縛られない」というオンライン英会話のメリットを享受できなくなるが、オンライン英会話最大のメリットは「英語使用機会の増加」であると考えていたため、この決断に迷いはなかった。

### 4.3.2 正規授業か放課後プログラムか

次に、正規授業に組み込むのか、放課後プログラムとして実施するのが問題に上がった。この議論に至った時には、もう3月に差し掛かっていたため、教務ではすでに次年度の時間割がしっかりと組まれており、正規授業として導入するのは難しいことがわかった。したがって、初年度は放課後プログラムとしてスタートさせることになった。

### 4.3.3 受講頻度

続いて受講頻度を検討した。先ほども触れた通り、オンライン英会話導入の主たる目的は「英語使用機会の増加」であったため、「受講回数はできるだけ多く」ということが念頭にあった。しかしながら、学校で毎日受講するのは、後に触れる受講場所の確保の問題もあり、現実的でないことが判明した。色々模索した結果、学校で週3回（25分×3回）、自宅で週2回（15分×2回）、合計週5回でスタートすることになった（2016年度以降、学校受講2回、自宅受講2回、合計週4回に変更）。

学校受講では教材をベースに進め、自宅受講では教材は使わずフリートークを進めることにした。自宅受講をフリートークにしたのは、受講時間が15分と短いことが大きかった。教材を使ったレッスン形式が続くと、どうしても「授業を受けている」感覚が強くなってしまい、息苦しさを感じる生徒がいるからだ。そのため、フリートークを入れることで若干の「あそび」をもたせ、会

話そのものを楽しむゆとりを残すようにした。

#### 4.4 教材・講師・カリキュラム

##### 4.4.1 教材

導入形態が固まり、カリキュラムや教材を選定する段階に入った。オンライン英会話サービスを提供する会社にはそれぞれ独自のプログラムやカリキュラムがあり、教材についてもオリジナルのものや既存のものを利用するなど様々である。株式会社ぐんぐんからご提案いただいたのは、既存の英会話テキストに合わせて授業を進めていく方法であった。この形であれば、カリキュラムはすでに教材の中で組み立てられており、レベル分けも明確になっているため、導入の手間は少ない。しかし、検討の結果、ご提案いただいたテキストは、本校の生徒には必ずしもマッチしたのではないと判断し、オリジナルのものを作成することになった。

そこでまず、日本英語検定協会に連絡し、英語検定の二次面接試験の過去問を教材として使用できないか問い合わせた。二次面接試験は、音読、状況描写、内容理解、意見の提示など、バランスの取れた内容となっており、レッスン時間も本校のプログラムにマッチしていたため最適と考えたのだが、残念ながら著作権の問題から使用することができなかった。そのため、株式会社ベネッセコーポレーションに協力を仰ぎ、過去の模試で使用されたリスニングテストのスク립トで、著作権の問題をクリアしている素材を使用させていただけることになった。

##### 4.4.2 講師

先述の通り、本校での導入にご協力いただいている株式会社ぐんぐんをはじめ、多くのオンライン英会話サービスがフィリピンに拠点を置き、ビジネスを展開している。ここではフィリピン人講師について少し触れておきたい。

フィリピンはかつてアメリカの植民地となっていた過去を持ち、その歴史からフィリピン語（タガログ語を基にした人工言語）と並び英語が公用語に指定されている。英語教育は小学校から始まり、街の中における看板や広告など、多くのものが英語表記となっている。また、映画などの娯楽についても英語圏から入ってきたものは字幕・吹

き替えなしで放映される。日常生活を取り巻く英語環境は日本よりも整っていると言える。

フィリピン人講師の特徴を挙げると以下のようなものがある。

- (1) 言語習得に対する知識と理解を持つ
- (2) 明るくポジティブな性格
- (3) 英語のレベルは個人差があり、なまりがある人もいる

まず1つ目についてだが、フィリピンは多民族・多言語国家のため、多くの人が複数の言語を操る。英語圏で生まれ母語として英語を習得したネイティブスピーカーと違い、外国語（第二言語）として英語を学習し習得しているため、言語習得の過程や難しさに一定の理解がある。日本語との言語体系の違いから、つまずきのポイントそのものが一致しているわけではないが、単語の難易度に対する感覚はいわゆるネイティブスピーカーの講師よりも一般的に高いと言える。

続いて2つ目の「性格」についてだが、もちろん個人差はあるものの、概して多くのフィリピン人が明るく前向きな性質を持っており、それゆえに英語レッスンにおけるフィードバックも非常にポジティブなものが多い。ミスをしても答えに詰まっても、前向きに励ましてくれるため、初級者には特に適している。

最後にフィリピン人講師の「英語」についてだが、育った環境や受けてきた教育によって、レベルや発音に差があることは否めない。また、文法が不正確であったり、訛りの強い英語を話す講師がいるのも事実である。しかし、そうしたことにばかりに気を取られ、訛りのないキレイな英語を話すことを目標にしがちな日本人英語学習者にとっては、フィリピン人講師の英語に対する姿勢そのものから大いに学ぶところがあるのではないだろうか。生徒をはじめ、保護者や教員までもが、アメリカ英語やイギリス英語だけを「正しい英語」と認識している場合があるため、「アジアの英語」の存在を理解する上では非常によい機会と考えられる。

##### 4.4.3 レベル設定

株式会社ベネッセコーポレーションのご厚意により、模試のスク립ト素材を使用できることになり、本校英語科の教員で協力し、スク립トを

Beginner, Basic, Intermediateの3段階に割り振った。割り振りの基準は、(1) 語彙レベルと(2) テキストの長さ(語彙数)とした。本校は、一般入試のほかに、帰国生入試も行っており、帰国生向けにAdvancedというレベルも設けたが、こちらはインターネット上にあるニュース記事をテキストとして利用し、レッスンを進めることとした。各レベルの対象目安は以下の通りである。

- (1) Beginner：中学2年生向け(英検3級程度)
- (2) Basic：中学3年生向け(英検準2級程度)
- (3) Intermediate：高校1年生向け(英検2級程度)
- (4) Advanced：帰国子女向け(英検準1級～1級程度)

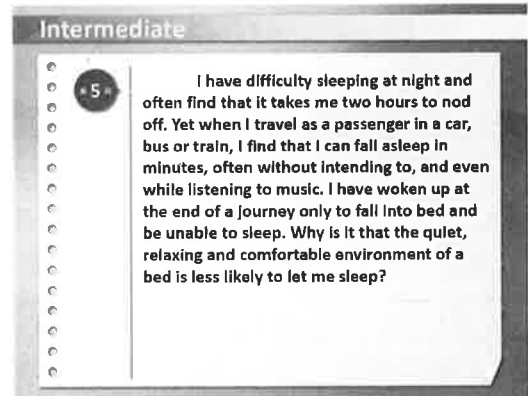
上記のレベル分けからわかる通り、本プログラムの対象学年は中学2年生からとした。中学1年生は、英語学習を開始して間もないため、英会話のレッスンには時期尚早と判断した。

#### 4.4.4 レッソンの流れ

学校受講における毎回のレッスン(25分)は以下のような流れとした。

- (1) 簡単な挨拶・自己紹介(約5分)
- (2) テキストの音読(約2分)
- (3) 単語の意味、発音の確認(約3分)
- (4) テキストの内容に関する質問を3つ(約5分)
- (5) テキストの内容に関する自分の意見(約5分)
- (6) テキストの内容をもとに、様々な話題を議論(約5分)

図1にあるように、本校が作成したテキストにはイラストがなく、一般的な英会話教材とはまったく異なるものになっている。これが学習者の学習意欲を最大限に引き出す形かどうかは議論の余地があるが、教材作成の上で重要視したのは、スピーキングの練習だけに偏らず、リーディングやリスニングの練習もバランスよく取り入れることであった。テキストの音読をしたり、本文の内容に関する質問に答えることで、リーディングスキルの育成も同時にはかっている。



■ 図1: オンライン英会話講座用のテキスト (Intermediateレベル)

## 4.5 受講時間

学校受講における受講時間は1コマ目15:30～15:55、2コマ目16:00～16:25とした。一度に全員が受講できればよいのだが、講師の手配の関係から2コマに分けることとなった。受講生が増えた2016年度からは、放課後受講に加えて早朝受講も可能にし、以下のような3つの時間帯を作った。

- (1) 早朝 7:40～8:05
- (2) 放課後① 15:30～15:55
- (3) 放課後② 16:00～16:25

放課後②の時間帯の場合、6時間目の授業が終了する15:10から50分間の時間が空くため、生徒はたいてい放課後①の時間帯を希望する。しかし、先述の理由から、受講生の数はある程度均等にする必要があったため、学校および業者サイドで人数調整を行った。調整の結果、希望した時間帯での受講がかなわない生徒も当然ながら現れたが、その旨は事前に説明してあったので、大きな問題にはならなかった。

ちなみに、各時間帯の受講時間が30分でなく、25分となっているのは、講師が次の時間帯のレッスンに備えるための時間(5分)を設定していることによるものであり、オンライン英会話では一般的な設定となっている。

## 4.6 受講環境の整備

### 4.6.1 受講場所の選定

学校にもよるのだろうが、校内において自由

に使えるスペースというのはありそうで意外にない。本校は2014年に校舎を建て替えたばかりで、設計の時点では本プログラムの導入案は上がっていなかったため、新たに専用の場所を作ることではできなかった。そのため、試験段階の第1フェーズでは、150人収容可能な中規模程度の教室を受講場所として使用することにした。

#### 4.6.2 Wi-Fi環境の整備

受講場所の選定と同時に急務となったのがWi-Fi環境の整備であった。オンライン英会話の導入にWi-Fi環境は不可欠であった。いずれはWi-Fi環境を整備することも計画していたが、校舎建て替えの時点ではまさかこんなにも早くその時が訪れるとは思わなかった。慌てて校内のコンピュータ担当の教員に掛け合い、校内のWi-Fi環境を整えてもらうことにした。第1フェーズでは、先述の150人収容可能な中規模教室に試験的にルーターを設置し、その後、第2フェーズ以降、段階的に各教室にもルーターを設置して、Wi-Fi環境を整備していく計画を立てた。

#### 4.6.3 適切な受講環境の確保

第2フェーズに入り、通常教室にもルーターを設置したため、通常教室での受講が可能になった。当初は、通常教室での受講の方が、生徒目線で考えても、移動もないため受講しやすいと考えていた。しかしながら、徐々にいくつかの問題が顕在化してきた。

まず、教室清掃の問題。本校では教室清掃を6時間目の授業終了後、当番の生徒が担当すること

になっている。授業終了時刻は15:10で、オンライン英会話プログラムの開始時刻が15:30。つまり清掃時間は20分間とることが理屈上は可能であるが、実際は授業が延長したりすることもあり、清掃が15:30に終わらないこともしばしばであった。また、部活動の準備をする生徒がいたり、談笑を楽しむ生徒もいたりするため、受講開始時刻の15:30になっても、受講生以外の生徒が様々な理由から教室に残っていることが多かった。

そこで、受講監督にあたる教員が、受講に関係のない生徒に教室から出ていくよう指示をするようにしたのだが、これが思いのほか心苦しいものであった。放課後の教室で他愛もない会話を友人同士で楽しむことは、学校の機能として決して無視できるものではない。むしろ、今後インターネット化が進みオンライン上での学びが増えていく可能性を考えると、校内においてそういった空間を確保することは学校の存在意義にも関わることである。

また、受講を待つ生徒の居場所の問題も出てきた。15:30から受講できる生徒はいいのだが、人数調整の結果、16:00からの時間帯に割り振られた生徒は、15:10の授業終了から受講まで50分ほど待つ必要があった。このこと自体は仕方ないことなのだが、受講を待つ生徒の待機場所がないのが問題だった。そこで、受講教室のうち一つを待機場所としたのだが、端末を持った生徒たちがWi-Fi環境下に置かれれば、ゲームや動画に興じるのは当然の成り行きであった。

こうした経緯から、やはり受講専用の場所を確保することが必要だという結論に至った。放課後



■図2:iPad miniを使用した受講の様子



空いている比較的規模の大きい部屋を再度探し、そこを新たに受講場所とした。生徒は受講時刻になったら、その教室に行き受講をする。受講専用の教室のため受講の妨げになるようなものもなく、一方、通常教室では今まで通り生徒が放課後の談笑を楽しむことができるようになった。

#### 4.6.4 受講者数の推移

2015年1学期の第1フェーズから、2016年1学期の第4フェーズまでの受講者数の推移は以下の通りである。

##### 第1フェーズ 2015年度

1学期：45名（中2:15名，中3:15名，高1:15名）

##### 第2フェーズ

2学期：245名（中2:112名，中3:87名，高1:46名）

##### 第3フェーズ

3学期：253名（中2:145名，中3:80名，高1:28名）

##### 第4フェーズ 2016年度

1学期：433名（中2:227名，中3:130名，高1:69名，高2:7名）

学年が上がるにつれて受講者の数が少なくなっているのがわかるが、これは単純に上級生の方が勉強や部活、課外活動等、活動の幅が広がり、時間の確保が難しくなっていることが一番の要因だと考えられる。

## 4.7 使用端末の選定

### 4.7.1 第1フェーズ：iPad mini

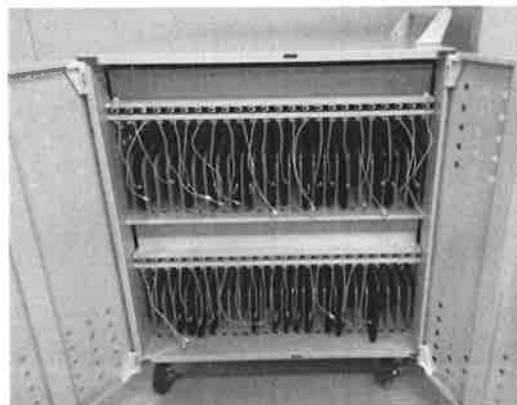
受講環境の整備とともに検討が必要になったのが、端末の選定であった。計画立案から時間があまりなかったこともあり、第1フェーズの試験実施の段階では導入事例の多いApple社のiPad miniを50台購入し、受講者に無償で貸与することにした。ただし、この時点では端末使用に関する校内のルールが何も決まっていなかったため、貸与は学校受講の際のみとした。したがって、自宅受講の際は生徒が各自の端末を使用して受講してもらうことになった。そういった背景もあり、第1フェーズの試験施行は、受講費用を学校が半額負担する形で実施した。

iPad miniの操作については、iPhone等のスマートフォンで慣れている生徒には造作無いことで

あったが、タブレット自体初めて触れるという生徒も少なくなく、そうした生徒には説明会を開催し、校内Wi-Fiへの接続や簡単な操作、Skypeアプリのダウンロードや設定等の指導をした。

### 4.7.2 学校管理端末の保管

端末は、学校受講時のみ生徒に貸与することになったため、管理及び充電は学校側で行うことになった。受講がはじまって気づいたのだが、iPad 50台を職員室から受講場所まで運び、受講後は職員室に持ち帰り充電をし、鍵のかかる部屋で管理するというのは、なかなか手間のかかる作業であった。そこで、今後のことも考え、図3のような充電機能付きの専用カートを購入し、受講場所に常時置いておくようにした。受講時刻になったら教員が鍵を開け、生徒はカートから端末を取り出し、受講後は自分で所定の位置に返却をするシステムにした。



■図3:iPad充電専用カート(1度に45台まで充電ができ、カートには鍵がかけられる)

### 4.7.3 第2・3フェーズ：

#### BYOD (Bring Your Own Device) 方式の採用

第2フェーズからは、希望者全員を受講対象としたため、学校で端末を用意せず、各自に端末を持ってきてもらうBYOD (Bring Your Own Device) のスタイルを取ることにした。生徒の中には、タブレットやノートパソコンなど、Wi-Fiを受信可能な端末を何かしら持っている家庭も少なくないため、このプログラムのためだけに改めて端末を買い直す必要がないようにした。たとえタブレットがなくても、スマートフォンを所有する生徒は昨今急増していることもあり、

BYOD方式の選択はある意味必然だったのかもしれない。

BYOD方式に変更したことにより、学校側で端末の設定や充電をする手間はなくなったが、生徒の端末操作のサポートが難しくなった。第1フェーズではiPad miniを全員が使用していたため、操作におけるトラブルもある程度限られていたが、生徒各自がKindleやNexusなど、それぞれの端末を持ってくるようになると、受講監督者の方ですべてのトラブルに対応することが難しくなった。しかし、1ヶ月もすると生徒は端末操作に慣れ、自在に操作するようになったので大きな問題にはならなかった。

#### 4.7.4 第4フェーズ：Chromebookの導入

第2フェーズ、第3フェーズについては、希望制としていたため、BYOD方式で一貫して実施をした。しかし、先述の通り、2016年4月からの第4フェーズでは、中学2年生対象にオンライン英会話を全員必修課題にしていたため、指導上の理由から、学校として端末を統一する必要があった。生徒一人ひとりが異なる端末を所有していると、先のケースにも見られたように、端末操作のサポートが非常に困難で、授業等で一斉利用をする際にも支障をきたすことが予想された。そうした背景から端末の検討を重ね、最終的にはChromebookを選択することにした。

Chromebookについては、日本国内ではまだなじみが薄いようだが、米国における教育市場では大きなシェアを誇り、学校等で広く利用されている。岡田（2015）によれば、Chromebookには以下のような特徴がある。

- (1) GoogleのChrome OSで動作
- (2) すべての作業はブラウザ上で操作
- (3) クラウドにデータ保存
- (4) メンテナンスが簡単

これらの特徴を加味し、本校でChromebookを採用することにした理由は下記の通りである。

- (1) Google Apps for Educationをすでに導入し、生徒全員にメールアドレスを配布していたため
- (2) 管理コンソールの操作に慣れており、管理がしやすいため
- (3) インターネット接続のない状態ではほとん

- ど機能せず、遊び道具になりにくい
- (4) タブレットと異なり、キーボードが付いており、タイピングスキル向上にもつながるため
- (5) 一般のコンピュータに比べると比較的低価格なため（約4万円）
- (6) 起動までの時間が約7秒と短いため



■図4:本校で採用したChromebook (ASUS Chromebook Flip C100PA)。フリップ式になっており、360度回転させるとタブレットとしても機能する

## 4.8 無料通話ツール

### 4.8.1 Skype

オンライン英会話のリーズナブルな料金を支える要素の一つに無料通話ツールSkypeの存在がある。実際のところ、オンライン英会話事業を運営する企業の多くが、Skypeを通じてサービスを提供している。株式会社ぐんぐんも同様であったため、iPad miniを利用した第1フェーズ、BYOD方式をとった第2フェーズ・第3フェーズでは、本校でもSkypeを利用しプログラムを運営していた。

### 4.8.2 ハングアウト

第4フェーズに入ってから引き続きSkypeを利用できればよかったのだが、そうはいかなかった。第4フェーズに入り、上記に挙げたChromebookを学年で統一して導入することになったのだが、Chromebookはいくつものメリットがある一方、Skypeが利用できないという弱点があった（2016年5月現在）。Chromebookで無料通話をしようとする場合、Skypeではなく、ハング



アウトというGoogleのアプリを使わなければならない。

しかし、ハンガアウトを使ったオンライン英会話サービスの実践例はまだ少ない。パートナーとなった株式会社ぐんぐんも、ハンガアウトを使用して授業を行った経験はあったものの、うまく回線がつかまらないというトラブルが相次いでいた。ハンガアウトによる受講がうまくいかない理由は明確にはわかっていないが、考えられる理由としては、Skypeの仕様に慣れている人にとってハンガアウトの仕様が少々わかりにくいということぐらいであった。これは受講生側にだけ当てはまることではなく、授業をする側の講師の方々にも言えることのように、操作に慣れるまでには多少のトレーニングが必要とのことだった。

こうした背景から、第4フェーズ開始にあたっては、より一層の緊張感をもって準備を進め、ハンガアウトの操作方法を指導する機会を事前に設けた。その甲斐あってか、トラブルは最小限に抑えられ、予想以上にスムーズに受講をスタートさせることができた。しかし、それでもうまく繋がらないケースが毎回のように何件もあり、全員が無事に受講できない状態が続いた。ハンガアウトで受講する中学2年生以外は、これまで同様Skypeを利用していたが、こちらは問題なく全員無事に受講できていた。このことから校内におけるWi-Fiの強度や環境が原因でないことだけは明らかであった。

どうにかできないものかと、ハンガアウト操作を色々と実験した結果、Google Apps for Educationを利用してアカウントを作成した場合、同一ドメイン同士ではハンガアウトで繋がる際の手順が、一般ユーザーと繋がる時に比べると多少単純化されることがわかった。そこで、ハンガアウト英語講座専用のアカウントを校内で作成し、株式会社ぐんぐんに使用してもらうことにした。この作戦が見事の中し、生徒と講師が問題なくハンガアウト上で繋がるできるようになった。オンライン英会話でハンガアウトを使う際には、この方法は非常に有効であると言える。

## 4.9 受講登録およびスケジュール

### 4.9.1 紙ベースによる申し込み・登録

受講登録の管理とスケジュールの作成についてまとめておきたい。第1フェーズから第3フェーズまでは、紙ベースでの登録を行っていた。申込用紙を作成して配布し、締め切った段階で申込者にものみ、希望受講や時間を提出してもらった。それをこちらでエクセルに打ち込み、データ化してスケジュールを組んでいくという気の遠くなるような作業を行い続けた。

### 4.9.2 Google フォームによる申し込み・登録

しかし、第4フェーズに入ると、受講者数がこれまでの2倍になるため、引き続きこの方法で登録を行うのはおおよそ不可能に思えた。そこでGoogleの「フォーム」というアプリを使用して登録を行うことにした。フォームとは、アンケートを採ることを目的に開発されたアプリで、収集されたデータをスプレッドシートと呼ばれるエクセル同様のフォーマットに自動的に流し込んでくれるものである。このアプリの利用により、申し込みから受講希望登録までの手入力が一切必要なくなった。

入力作業がなくなったことに喜びを感じていたのも束の間、すぐに次なる問題が浮上した。フォームをうまく入力して送ることができない生徒や保護者が多くいたのだ。これは誤算であったが、よく考えれば自然なことで、すべての生徒や保護者が端末の操作やアプリの使用に慣れているはずがなかったのだ。入力や登録がうまくいかない生徒や保護者には、電話やメール、直接の問い合わせで一つ一つ解決していき、全員分の登録を済ませるまでにはおおよそ3週間を要した。

### 4.9.3 Google フォームを

#### うまく登録できない要因

フォームの入力や登録がうまくいかない要因は、主に2つあった。1つは、保護者の多くが本校で作成した保護者用アカウントを利用せず、自身がメインで使用するアカウントにメールを転送設定していたことによる。本校から配信・共有するデータは、同一ドメインユーザーのみが回答できるように設定してあるため、転送設

定により送られてきたメールを開きフォームに回答しようとする、保護者用アカウントへのログインを求められる。しかし、残念なことにパスワードを忘れてしまっている方も少なくなく、結果ログインができないというケースが相次いだ。2つ目の原因は、生徒や保護者がもともと所有していたGmailアカウントにあった。生徒や保護者の中には、もともとプライベートのGmailアカウントを作成している人が多くいた。もちろん別のGmailアカウントを所有すること自体は問題ない。しかし、自身で作成したアカウントでログイン状態を保持したまましていると、先の理由から、本校が配信・共有するデータにアクセスすることができないのだ。この仕組みを生徒や保護者に説明しないまま手続きを進めようとしたことが失敗の要因であった。

Google Apps for Educationについては、非常に便利な反面、こういった複雑さがついてくるのが難しいところである。しかしながら、今後様々な用途で使用していく中で、学校、生徒、保護者ともに徐々に慣れていき、トラブルは減っていくのではないかと予想している。

## 5 研究内容

### 5.1 研究目的

本研究において明らかにしようとしているのは、以下の2点である。

- (1) オンライン英会話は、学習者の英語力向上に効果があるのか
- (2) オンライン英会話は、学習者のモチベーション向上に効果があるのか

### 5.2 研究方法

#### 5.2.1 実験協力者、アンケート協力者

実験協力者：聖光学院中学校3年生40名

アンケート協力者：聖光学院中学校2年生、3年生、高等学校1年生、合計91名

#### 5.2.2 オンライン英会話プログラムの実施

前章「4 導入手順」で示したような流れでプログラムを実施した。実験の対象となる期間は2015年9月から2016年1月（第2フェーズから第3フェーズの頭にかけて）までの約4ヶ月間とした。

#### 5.2.3 プレテスト・ポストテストの実施

オンライン英会話を週に5回（学校で3回＋自宅で2回）受講する実験群20名と、オンライン英会話を受講しない統制群20名、合計40名を対象にプレテストとポストテストを行った。プレテストは2015年9月、ポストテストは2016年1月にそれぞれ実施した。効果測定にはGTEC for STUDENTSを採用した。GTEC for STUDENTSはリーディング、リスニング、ライティングの3技能で構成されるテストである。オンライン英会話で伸びがもっとも期待されているスピーキングについては、残念ながらテスト実施の手配が間に合わず、適切なテストを行うに至らなかった。

#### 5.2.4 アンケートの実施

プレテスト・ポストテストとは別に、受講生253名に資料1のアンケートを配布し、90名の生徒から回答が得られた。アンケートは第3フェーズが終了した、2016年3月に実施した。

#### 5.2.5 分析方法

実験群と統制群それぞれの、プレテストとポストテストの差を比較する。スキル別（リーディング、リスニング、ライティング）の比較と、トータルスコアの比較を行い、オンライン英会話の英語力向上への効果を検討する。また、アンケート調査の結果をもとに、オンライン英会話が英語学習へのモチベーション向上にも効果があるかどうか、あわせて検討していく。

## 6

## 結果と考察

## 6.1 実験結果

実験の結果は表1と表2のようになった。リーディング、リスニング、ライティング、トータルスコアのいずれも、プレテストからポストテストの点差において、実験群が統制群を上回っ

た。とりわけ、リスニングセッションにおける伸びの差が一番大きく、このことはオンライン英会話における学習が、リスニング力向上に寄与していることを示唆していると言える。一方、リーディングセッションについては差異がほとんど見られなかった。本プログラムでは、読解力も伸ばすことを想定していたため、この結果は残念なものであった。また、ライティングセッションについては、実験群、統制群ともに大きな伸びが見られなかった。

表1: 実験群

生徒	リーディング			リスニング			ライティング			トータルスコア		
	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差
1	202	202	0	284	317	33	141	139	-2	627	658	31
2	195	235	40	224	244	20	132	134	2	551	613	62
3	171	195	24	184	219	35	132	129	-3	487	543	56
4	188	198	10	196	239	43	132	137	5	516	574	58
5	230	254	24	213	320	107	132	129	-3	575	703	128
6	235	254	19	210	294	84	129	137	8	574	685	111
7	267	293	26	319	320	1	153	158	5	739	771	32
8	202	245	43	248	263	15	128	144	16	578	652	74
9	212	235	23	234	266	32	146	137	-9	592	638	46
10	215	281	66	232	273	41	132	139	7	579	693	114
11	236	240	4	254	263	9	146	137	-9	636	640	4
12	216	225	9	281	288	7	132	144	12	629	657	28
13	235	201	-34	258	304	46	110	134	24	603	639	36
14	167	175	8	216	236	20	132	127	-5	515	538	23
15	271	304	33	320	302	-18	146	150	4	737	756	19
16	212	254	42	264	308	44	132	140	8	608	702	94
17	156	183	27	166	187	21	110	132	22	432	502	70
18	185	220	35	211	226	15	132	134	2	528	580	52
19	226	238	12	236	258	22	138	134	-4	600	630	30
20	202	261	59	251	267	16	146	147	1	599	675	76
平均	211.15	234.65	23.5	240.05	269.7	29.65	134.05	138.1	4.05	585.25	642.45	57.2

表2:統制群

生徒	リーディング			リスニング			ライティング			トータルスコア		
	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差	プレ	ポスト	差
21	212	214	2	239	312	73	126	137	11	577	663	86
22	194	222	28	236	262	26	132	137	5	562	621	59
23	320	320	0	320	320	0	151	170	19	791	810	19
24	224	227	3	288	306	18	120	137	17	632	670	38
25	293	293	0	238	235	-3	146	131	-15	677	659	-18
26	247	270	23	320	320	0	110	137	27	677	727	50
27	202	204	2	226	223	-3	129	134	5	557	561	4
28	241	264	23	267	273	6	130	137	7	638	674	36
29	194	281	87	212	233	21	138	129	-9	544	643	99
30	209	228	19	210	254	44	146	137	-9	565	619	54
31	241	318	77	272	272	0	146	129	-17	659	719	60
32	163	207	44	215	237	22	132	140	8	510	584	74
33	193	221	28	207	258	51	117	123	6	517	602	85
34	219	238	19	237	273	36	132	134	2	588	645	57
35	190	198	8	176	230	54	120	129	9	486	557	71
36	172	174	2	206	256	50	129	134	5	507	564	57
37	157	164	7	207	223	16	129	117	-12	493	504	11
38	270	320	50	277	295	18	152	137	-15	699	752	53
39	175	204	29	194	236	42	146	144	-2	515	584	69
40	160	171	11	157	185	28	120	124	4	437	480	43
平均	213.8	236.9	23.1	235.2	260.15	24.95	132.55	134.85	2.3	581.55	631.9	50.35

## 6.2 アンケート結果

### 6.2.1 スピーキング力および

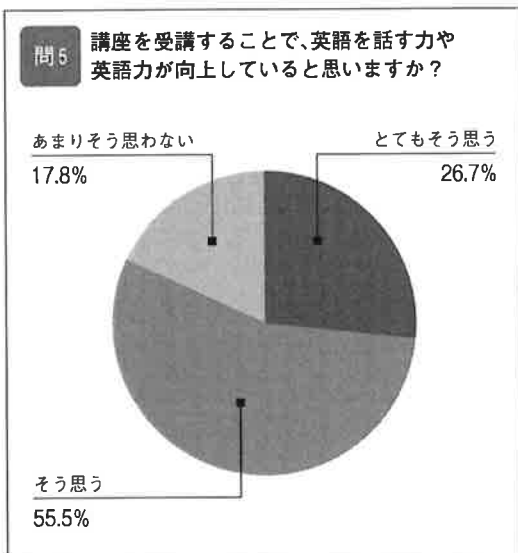
#### 英語力の伸びに関する実感

アンケート調査のうち、スピーキング力や英語力の向上に関する学習者の実感については、図5のような結果となった。回答者90名のうち、「とてもそう思う」が24名、「そう思う」が50名、「あまりそう思わない」が16名となり、74名（82.2%）が英語力の向上に対し、自覚を示した。

### 6.2.2 英語学習に対する

#### モチベーションに関する実感

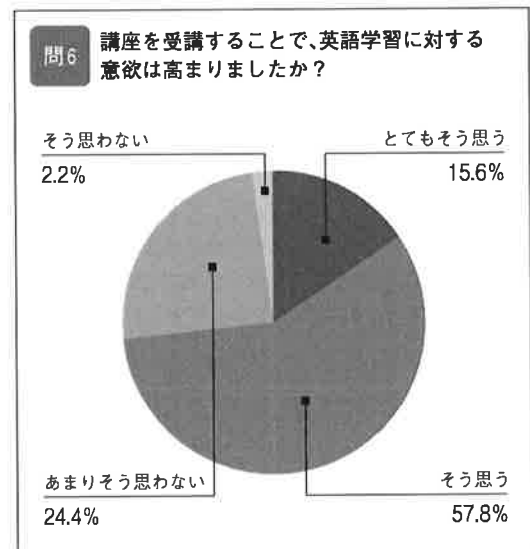
英語学習に対するモチベーションに関する実感については、図6のような結果となった。回答者90名のうち、「とてもそう思う」が14名、「そう思う」が52名、「あまりそう思わない」が22名、「そう思わない」が2名となり、66名（73.4%）が英語学習に対しモチベーションが高まったと回答した。



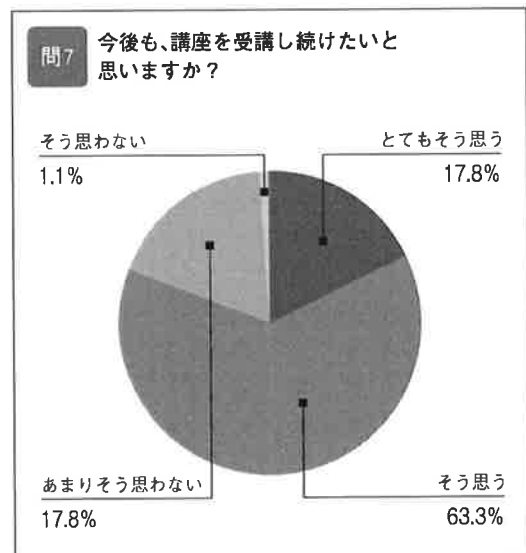
■ 図5: スピーキング力および英語力の伸びに関する実感

### 6.2.3 オンライン英会話講座を 継続受講することへの意欲

オンライン英会話講座を継続受講することへの意欲については、図7のような結果となった。回答者90名のうち、「とてもそう思う」が16名、「そう思う」が57名、「あまりそう思わない」が16名、「そう思わない」が1名となり、73名（81.1%）が引き続きオンライン英会話を受講することに意欲的であることがわかった。



■ 図6: 英語学習に対するモチベーションに関する実感



■ 図7: オンライン英会話講座を継続受講することへの意欲

### 6.3 考察

今回の実験結果では、実験群と統制群の間に若干の差異は見られたものの、オンライン英会話で英語力の向上に効果があると言い切れるほどの有意な差は見られなかった。これは主に、実験デザインの設計ミスによるものと考えられる。まず、効果測定に用いたテストの問題が大きい。リーディング・リスニング・ライティングの3技能を測るGTEC for STUDENTSを採用したため、オンライン英会話でもっとも伸びが期待される肝心のスピーキングについて、効果を測ることが出来なかったのは反省すべき点である。

また、実験参加者の英語学習へのモチベーションを考慮に入れていなかった点も大きい。あくまで筆者の教員としての主観的観察ではあるが、統制群の実験参加者の多くが英語学習に高いモチベーションを持っていたように思う。つまり、オンライン英会話は受講しなかったが、英語学習そのものには積極的に学習も習慣化しており、英語力向上はある程度見込まれている生徒が多かった。一方、実験群の実験参加者には比較的モチベーションの低い生徒が多く見られた。こうした判断を、筆者の主観のみからするのではなく、実験参加者にアンケートを実施して、客観的に判断すべきであったと反省している。

このように実験の設計段階でのミスにより、英語力向上への効果については、はっきりとした結果を示すことができなかった。しかし、アンケート調査に関しては十分な結果を示すことができたと感じている。中でも、多くの学習者が講座を受講することで自身のパフォーマンスが向上したと感じているのは特筆すべき点である。自分自身に対するポジティブなフィードバックは、学習を継続していくモチベーションに大きな影響を与えるため、非常に重要な要素である。スピーキング力が、元来伸びるまでに時間を要するスキルであることを鑑みると、今後、半年や1年といった長期での更なる研究がなされることで、大きな効果が見られるのではないかと期待している。

### 謝辞

本研究を行う機会を与えていただいた公益財団法人 日本英語検定協会と選考委員の先生方に感謝いたします。とりわけ、ご担当いただいた長勝彦先生には厚く御礼申し上げます。思うような研究データが得られず悩んだ時期もありましたが、その度に「現場で必要とされる情報を具体的に」という先生のご助言に立ち返り、研究の実施および報告書の執筆にあたらせていただきました。

また、本校におけるオンライン英会話導入を検討段階からサポートいただいている株式会社ベネッセコーポレーション、株式会社ぐんぐんには、本研究にも多大なるご協力をいただき、感謝の言葉が見つかりません。今後更に良いプログラムにしていくためにも、引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

そして本研究の実験やアンケート調査にご協力いただいた聖光学院中学校高等学校の生徒と、先生方にもこの場を借りてお礼を言わせていただきます。

最後に、最大の理解者であり絶えず刺激を与え続けてくれる妻と、至らぬ私を父親に選び本研究の過程で我が家に舞い降りてきくれた我が子に感謝したいと思います。

参考文献(\*は引用文献)

- \* 嬉野克也. (2013). 『オンライン英会話の教科書』. 東京: 国際語学社.
- 英語4技能 資格・検定試験懇談会. (2015). 「新たな英語教育のための改革とその背景」. <http://4skills.eiken.or.jp/education/neweducation.html> (2016年4月22日閲覧)
- \* 岡田拓人. (2015). 『Chromebook徹底活用ガイド』. 東京: マイナビ.
- \* 加藤智久. (2011). 『129円のマンツーマン英会話 スカイプ英語勉強法』. 東京: 幻冬舎.
- 國弘正雄. (1999). 『國弘流 英語の話しかた』. 東京: たちばな出版.
- \* ダイヤモンド社. (2015). 「オンライン英会話 驚威の進化」. 『週刊ダイヤモンド2015年4月4日号』, pp. 62-65.
- \* 産経ニュース. (2015). 「海外とつながる『オンライン英会話』 学校教育に導入広がる」. <http://www.sankei.com/life/news/150513/lif1505130016-n1.html> (2016年3月20日閲覧)
- 晋遊社. (2015a). 「オンライン英会話の実力検証! レアジョブ vs DMM どっちがいいの?」. 『英語教材完全ガイド』. pp. 36-41.
- 晋遊社. (2015b). 「徹底活用オンライン英会話」. 『英会話完全ガイド』. pp. 18-33.
- 福田誠治. (2015) 『国際バカロレアとこれからの大学入試改革 知を創造するアクティブラーニング』. 東京: 亜紀書房.
- Fraenkel, J. R. & Wallen, N. E. (2006). *How to Design and Evaluate Research in Education (6th ed.)*. New York: McGraw-Hill.

資料: オンライン英会話受講に関するアンケート(2016年3月実施)

## 「Skype英語講座」アンケート

「Skype英語講座」に参加頂きありがとうございます。  
 今後の参考とするために、アンケートを行います。これまでの講座(学校・自宅)を振り返り、以下の各質問に答えてください。

\* Required

問1. 講座のレベルに対する感想を教えてください。\*

	とても 難しい	やや難 しい	ちよう どよい	やや簡 単であ る	簡単で ある
講座のレベル	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

問2. 学校受講の内容に対する満足度を教えてください。\*

	大変満 足	満足	ふつう (どち らでも ない)	やや不 満	不満
満足度	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

問3. 自宅受講の内容に対する満足度を教えてください。\*

	大変満 足	満足	ふつう (どち らでも ない)	やや不 満	不満
満足度	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

問4. 「講師」「授業の内容」「教材の内容」について、最もあてはまるものを1つ選んでください。\*

	とても よい	よい	ふつう (どち らでも ない)	悪い	とても 悪い
1. 講師	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 授業の内容	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 教材の内容	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

上記「問4」の回答についてそう思う理由を教えてください。\*

Your answer



問5. 講座を受講することで、英語を話す力や英語力が向上していると思いますか？ \*

	とても 思う	そう 思う	あまり 思わ ない	そう 思わ ない
話す力・英語力が向上した	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

上記「問5」の回答についてそう思う理由を教えてください。 \*

Your answer \_\_\_\_\_

問6. 講座を受講することで、英語学習に対する意欲は高まりましたか？ \*

	とても 思う	そう 思う	あまり 思わ ない	そう 思わ ない
学習意欲が高まった	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

上記「問6」の回答についてそう思う理由を教えてください。 \*

Your answer \_\_\_\_\_

問7. 今後も、講座を受講し続けたいと思いますか？ \*

	とても 思う	そう 思う	あまり 思わ ない	そう 思わ ない
今後も続けたい	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

上記「問7」の回答についてそう思う理由を教えてください。 \*

Your answer \_\_\_\_\_

問8. 講座の回数について、最もあてはまるものを選んで下さい。 \*

	多い	やや 多い	ちよ うど 多い	やや 少 ない	少 ない
受講回数 (学校)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
受講回数 (自宅)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

問9. 講師について、最もあてはまるものを選んで下さい。\*

- 毎回同じ講師が良い
- 毎回違う講師が良い
- 学校では同じ講師、自宅では毎回違う講師でちょうど良かった

問10. 学校受講に関して困ったことがあれば、教えて下さい。

Your answer

問11. 自宅受講に関して困ったことなどがあれば、教えて下さい。

Your answer

問12. 家庭のインターネット接続環境について教えて下さい。\*

- 無線LAN (WiFiなど) を利用している
- 有線LAN (ADSL, ISDN, 光など) を利用している
- インターネット環境には接続していない

問13. 自宅受講に際して、利用している機器を教えてください。\*

- タブレット
- スマートフォン
- PC
- その他

問14. 講座に対する感想や要望を自由に書いて下さい。

Your answer

SUBMIT

100%: You made it.

Never submit passwords through Google Forms.